ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興とガールズ・スクール・ストーリー

大田　信良

1. ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興、あるいは、児童文学の見直し

ハリー・ポッター現象とよばれるようなものがかつてあったことが記憶に新しい出来事として歴史的に存在している、と言ってもいいかもしれない。M. O. グレンビーが『英国におけるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャー』において提案しているように、近年、これまでにない目を見張るような成功を獲得した子ども向けの本がいくつか出現していることが、ポピュラーであることの意味をあらためて研究対象として取り上げて検討することばかりか旧来の児童文学の研究自体を見直す契機とするチャンスでもあるのだとすれば、なるほどたしかに、J・K・ローリングの「ハリー・ポッター」シリーズはまさにそのような再検討や見直しの作業においてふさわしいテクストということになるだろう。なぜなら、ローリングが産み出したシリーズは、英国国内のナショナルな文学・文化空間においてのみ人気を得て読まれているわけでもなければ子どもだけでなく大人も熱心なファンとするようなきわめて強力で強烈なグローバルに拡大・転回するポピュラリティを備えてきているのであってみれば、その意味で、それは、単なる子ども向けの文学作品の1例であるとかしばらくの間ターゲットとなる読者がはなれ凋落していた児童文学の復活を告げるものとして片づけることができないものであるからだ（Grenby 1）。言い換えれば、「ハリー・ポッター」シリーズとは、ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの顕著な成功例にほかならない、ということだ。[1]

このような「ハリー・ポッター」シリーズにみられるような文化状況を歴史的に把握したうえで、グレンビーは、コドモ文化（children’s culture）にお

けるポピュラーなるものの意味の理解・解釈に関する再評価が要請されていることを論じている。こうした再評価は、まずは、歴史的視点からなされるべきで、その際に、はたしてハリー・ポッター現象が独特で前例のないものなのか、あるいは、出版業界における盛衰の繰り返されるサイクルの一部に過ぎないのか、ということを吟味することから始まる。そのような作業においては、児童文学における人気や流行が、産み出されて持続されたりあるいは逆にその後すぐに失われていったりする経緯と理由が探られる、と同時に、ハリー・ポッターが文化的イコンになってゆく過程が、従来の子ども・児童のための本が出版され愛読されそして意味や価値のあるものとされてきた道程と同様のものなのか、問うていくことになるだろう。

ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの定義をめぐる問題について、グレンビーの議論を本論の趣旨に沿って確認しまとめ直しておこう。ポピュラーなるものすなわちポピュラー性の理解に関して、主として2つの異なる定義のやり方がある。ひとつは、ふつうの人びとの趣味・嗜好（taste）に合致しているものであるという定義であり、これにしたがえば、ポピュラーなチルドレンズ・リテラチャーとは、きわめてありふれていて低俗でもあるというだけでなく、作品の中身・テクスト自体がそれを受容する読者にとってきわめて満足を与えるような審美的価値をもっているものを指す。もうひとつ別の定義は、チルドレンズ・リテラチャーとして非常に好まれているかあるいは商業的に成功している作品ということであり、後者の量的に測定可能な価値は、前者の数値化することが必ずしもできないが質的にその意味を判断することができるテクストの場合と、一応のところ理論的に、差異化される。ただし、グレンビーも主張するように、この2つの基本的な定義は、一見相反し競合するようにみえて実は共存している（Grenby 1-2）。というのも、また、人びとの趣味に合いその審美的価値が高く判断されたものは非常に好まれて長く売買の対象として継続しうるものであるし、商業的および世俗的に成功して大量のセールスにつながり巨大な利益を産み出したもののなかにも、一定の審美的判断に耐える要素を備えつつさまざまな階級・階層あるいは社会的差異を越えた世界中の多様性に満ち満ちた読者・受容者の願望や欲望を代理表象するものもあるから。

実際、自身も児童書を執筆しながら『ガーディアン』紙において子どものための本の編集を担当し「ハリー・ポッター」シリーズのガイドブックも執筆しているジュリア・エクルシェアは、まずは、ローリングの小説テクスト自体を評価しているが、そのうえで、シリーズが成功した重要な要素として、

20世紀末における子ども向けの本の市場の不況があったことを指摘している。言い換えれば、1970・80年代にロアルド・ダールがなし得たように子どもたちの想像力を捉えるような本を産出できるような作者が、ローリングが登場する時期には、ほとんどひとりも存在しないという状況にあった、ということを考慮すべきだということである。出版市場は新たなヒーローあるいはヒロインを待望していた、そして、そうした市場の渇望という条件があって、ローリングの一連の「ハリー・ポッター」本の熱狂的でポピュラーな受容・消費が可能になった。かつてダールがガールズ・スクール・ストーリーの大ヒットと大量生産で戦間期の英国社会・文化において有名になったイーニッド・ブライトン後の空隙を埋めたということを思い起こせば了解されるように、子ども向けの本の成功には、テクスト自体の価値だけではなく、市場のセールス状況や歴史的コンテクストをなす出版のタイミングが決定的な要素であるといえる（Grenby 17）。[2]

このようなテクスト自体とそのコンテクストの関係のほかにも、テクストと読者との間を媒介する見逃しえない要因として、グローバルなトランス・メディア空間がある。もちろん、読書体験というものは、他の要因の影響があり、たとえば、挿絵のようなヴィジュアル・イメージ、そして、読者とのあいだの感情的な繋がりを構築しうる著書の経歴を語るエピソードやゴシップ（たとえば、ローリングのシングル・マザー時代の経験等々）等がまずはあげられるが、問題はそれだけではない。作者が生きている間ずっとポピュラーであることとその作者の死後もその名声や作品の人気が永久に持続することとは、別のことである。不滅の人気を獲得するひとつの手段は成功する法則を発見すること、別の言い方をすれば、ポピュラー性をめぐる秘密は、資本主義世界の歴史的進展・転回に応じてさまざまに継起する多種多様なメディア空間においてサヴァイヴァルするために進化し続ける能力にある、とグレンビーは論じている。たとえば、『不思議の国のアリス』や『宝島』を、英国植民地主義を反映した少年向けの冒険物語を書きヴィクトリア時代には人気のあったG・A・ヘンティや20世紀前半に人気を博したアンジェラ・ブラジルの小説テクストから差異化しているのは、文学の翻案可能性（adaptability）にあるとされる。そして、こうした翻案可能性をポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーあるいはグローバル・ポピュラー・カルチャーの領域において見事に実現・達成してみせているのが、いうまでもなく、「ハリー・ポッター」シリーズである。

> With Harry Potter, the adaptation and remediation is happening at the same time as the texts themselves appear, and even before, the publisher producing websites to trail the new books and films. But even before this, it has been the decisions of television and film producers, and publishers anxious to pioneer new markets, quite as much as the quality of the text itself, that has been responsible for a title remaining a popular classic, rather than following Henty, Hofland, Stretton and a multitude of other once-popular authors in obscurity.（Grenby 19）

頻繁に繰り返されるテクストの再発明やイノヴェーション――簡約版や挿絵版、TV におけるアニメ化、ラジオ・映画やゲームといったメディアにおけるさまざまなヴァージョニング、さらにはインターネットを通じたサイバー空間に非有機的に散種され存続するウェブサイトでの再生――に生き残り、永遠にコドモ文化の最先端にとどまり続けるということが必要ということだ。つまり、文学という制度化された空間の実質を構成する活字メディアにとどまらず、ほかのさまざまなメディア文化をナショナルだけでなくローカルかつグローバルに横断するようなトランス・メディア空間における反復可能性が、ポピュラーなるものの存在と意味を規定するということにほかならない。

さまざまな形式で繰り返し語り直されることで、ローリングの紡ぎだす物語がグローバルに転回するポピュラー・カルチャーの部分を構成するようになる。こうしたテクストは、文化的に浸透すると同時に愛着をもたれ続けるという点で、希有な永続性を付与されさまざまな形式における再生・復活を確保することになる。このようにして、「ハリー・ポッター」シリーズに代表される児童文学・文学テクストは、ポピュラー・カルチャーの領域に吸収・包摂されたあるいは自ら進んで浸透・参入していった、というのが『英国におけるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャー』をそのイントロダクションにおいて総括するグレンビーの議論である（Grenby 17-20）。旧来の児童文学の見直しを 21 世紀の現在において要請するポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興について、ひとまず、ポピュラーなるものの定義が審美的・商業的価値かつまた質的・量的意味の問題とわかちがたく結びついた関係にあり、この関係性自体はグローバルなトランス・メディア空間における再発明をともなう再生産・反復可能性によって捉えることができるかもしれない、以上のことが、確認された。

2. ポピュラー・カルチャーのグローバルな再編と自由の問題

本論がグローバル・ポピュラー・カルチャーの勃興のわかりやすい兆候としてとらえている「ハリー・ポッター」シリーズに言及しながら、たとえば、英文学・児童文学を専門とする研究者は、スクール・ストーリーの今後の見通しについて、次のように述べている。

> 階級を意識せずにパブリック・スクールの物語を無邪気に楽しむことが、難しい時代になった。「ハリー・ポッター」シリーズ…などに寄宿学校物語の残滓をみることができるにしても、寄宿学校物語そのものは滅びゆく運命にある。学校物語は、子どもたちだけで構築された別世界を描いた物語から、多様な階層の子どもたちの日常と彼らが属する共同体を描く物語に変容したが、子どもが初めて出合う社会としての学校は、依然として児童文学の枢要な舞台であり続けるだろう。(藤井 66)

ここで暗黙のうちに語られ前提とされている歴史的移行の物語はなにか、確認しておくのも無駄ではないだろう。それは、英国社会を構造的に規定する要因が、旧来の階級の問題から現在ではアイデンティティあるいは帰属の問題へと変化したという物語だ。寄宿学校物語が滅びてゆく運命にあるとともに、そうした教育や政治文化の空間で再生産され続けてきた階級構造も消滅してきているのであり、現在語られ読まれる学校物語が提示するのは、多様性に特徴づけられたさまざまな社会的差異（ジェンダー、人種、セクシュアリティ等々）をもとにした階層の子どもたちであり、そうしたアイデンティティあるいはアイデンティティ・ポリティクスの諸マーカーに規定されたグループ・アイデンティティ、帰属する共同体・コミュニティが彼らの集団生活が営まれる空間となっているということである。

こうした現在において、もしも学校が「子どもが初めて出合う社会」であり「依然として児童文学の枢要な舞台であり続ける」とするならばそれはいったい具体的にはどのような形式や機能においてなのかということについては括弧にくくるとして、現在の状況とは、いわゆる多文化主義の世界と呼ばれたものであるし、別の見方をすれば、グローバルな資本主義とネオリベラリズムの進展・進化した社会性なきセカイのことかもしれない。実際、残滓的に寄宿学校物語が残存するとみなされる「ハリー・ポッター」シリーズと現代資本主義世界のリベラリズムあるいは自由の問題との関係を論じた三浦玲

一の解釈がある。具体的には、2000年発表の第4巻を契機に、おもに学校生活を描く前半3巻と善悪の魔法使いの全面戦争の枠組みが前景化される後半3巻の対照が注目されて、以下のような結論が主張される。

> シリーズ前半の三巻で提示されるホグワーツ内での競技として[の]競争と、シリーズ最後の三巻で示されるヴォルデモートとの陰惨な戦いの対照は、シリーズ全体のイデオロギーとして、後半を排し、前半で示された「競争という機能」の新自由主義的な世界を回復すべきユートピアとして提示する機能を負っている。
>
> ダンブルドアが提示する多様性へのコミットメントは、確認したように、構造として、善からも悪からも切断された「純粋な差異」を、多様性の前提として求めるものであった。それは、前半のホグワーツでの競技において代表されたような差異であり、そして、そうであるならばそれは、新自由主義的な市場モデルに則った差異である。市場と資本主義は、消費のために、新たなる差異の生産を求め続ける。そして、それが市場で消費されるにふさわしい差異であるためには、その差異は、善からも悪からも切断されなければならないのだ。(三浦44)

三浦の解釈が提示したのは、ローリングの一連のテクストがネオリベラリズムのイデオロギーに特徴づけられその消費主義へ迎合しているとする批判ではなく、むしろ、このシリーズが、善悪の対立という英国児童文学の支配的なジャンルであるファンタジーの伝統――〈善＝英国リベラリズム〉vs〈悪＝ナチズム・全体主義〉といった二項対立にみられる、元来は政治的・イデオロギー的対立を道徳的・倫理的価値判断として普遍化する傾向・志向を含む――を使用しながら、英国リベラリズムあるいは「リベラル左翼」の示す多様性へのコミットメントがネオリベラルな世界観と親和的であることをきっちりと示している、という指摘である。言い換えれば、差別やアイデンティティをめぐる右翼と左翼の論争が、むしろ、その両者が自明の前提としてしまっているネオリベラリズム的な世界観や社会性の認識・否認を隠蔽している、とその解釈は指摘している。ならびにそのことが孕む意味の吟味である。つまり、一方で、グローバリゼーションと格差社会によってしばしば特徴づけられる現代資本主義世界のイデオロギーとしてのネオリベラリズム、他方で、多様性へのコミットメントや文化的差異のポリティクスあるいはかつての多文化主義の称揚を掲げた英国リベラリズム、これら両者の間には、実の

ところ、親和性があるつまり危険な関係にあるのであり、このことを密かに表象しているのが、ポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーまたはグローバル・ポピュラー・カルチャーのテクストとして生産・流通・消費された「ハリー・ポッター」シリーズだというテクストの読み・読解である。念のためにいっておくなら、ここでいうネオリベラリズムは、英国保守党政権期のサッチャリズムだけでなく、いわゆるブレア／ニュー・レイバーの「第3の道」とサッチャリズムという第1段階のネオリベラリズムをさらにヴァージョン・アップしたブレア政権期の「先進リベラリズム（advanced liberalism）」（Nikolas Rose）を含んでおり、ここで英国リベラリズムあるいは「リベラル左翼」として言及されるのは、後者のいわば第2段階に進化・進展したネオリベラリズムのことにほかならない。

三浦の「ハリー・ポッター」シリーズ論がその重要な先行研究のひとつとして部分的に依拠し言及もしているジェレミー・ギルバートは、ネオリベラリズムの一形態としてとらえられたブレア政権の「第3の道」の政策や特徴を反映したローリングの学校の描写や主人公をはじめとするキャラクターの表現について、議論している。ハリーが通う若き魔法使いを養成する想像上の寄宿学校ホグワーツが、旧来のパブリック・スクールのような階級による差別を含むものではなく、入学を選択する生徒の能力に基づいて運営される学校すなわち能力主義＝メリトクラシーに特徴づけられている点が、指摘される。次に、ギルバートによれば、主人公ハリーの階級上昇への志向あるいは野心の歴史的にユニークな特質は、英国19世紀の支配階級あるいはエリート層が抱いていた古い価値観という衣を纏っているにしても、そうしたものの下に透けてみえる成功物語の現代版、すなわち、自らの才能・資質・リソースを存分にフレキシブルに活用することで、自己実現をはたしマネーとパワーを獲得する道に専心する以外のことには配慮やケアをしないというライフスタイルにある。ローリングが表象するスクール・ストーリーの主人公は、一見したところ伝統的なイングリッシュネスのイメージに彩られた古臭いともいえる舞台設定と性格造型にもかかわらず、実際には、われわれが毎日の生活と労働をおこなうような現在の少年として提示されている、言い換えれば、ブレア／ニュー・レイバーの「第3の道」に合致するヒーローにほかならない――“Harry is presented to us as a boy for our times, even a mythical embodiment of all the priorities and prejudices which constitute the New Labour ‘structure of feeling’: a truly Blairite hero”（Gilbert）――ということだ。[3]

ただし、「ハリー・ポッター」シリーズがひそかに共犯関係を結ぶブレア政

権のネオリベラリズムの存在を批判的に炙り出すギルバートの解釈には、ある留保がつけられていることに、本論は、ひとまず注目することで、三浦の解釈にある種の反論を試みるというよりは、むしろ、彼の解釈をシェアしながら別のラインの研究プロジェクトを提示する可能性を探ってみたい。この留保とは、現代のグローバルな資本主義世界の進展・転回とともにネオリベラリズムによって取って代わられた福祉国家の社会政策やその機能を部分的に復活あるいは代替する社会活動を担う存在への言及である。

> It would be unfair to pretend that this was the whole story. Hermione, the activist, is a sympathetic character who very rarely turns out to be wrong, in a world where errors of judgement pave the way to damnation. What' s more, the books are clearly written from a boy' s perspective, and the boys' gradual realisation that Hermione is not just a swotty mate to be called on when library research is needed（one of the series' more interesting literary aspects）may yet come to encompass a more sympathetic attitude to her political radicalism in later volumes.（Gilbert）

別の言い方をすれば、反ネオリベラリズムを実践する政治的ラディカリズムを表象する可能性をもつハーマイオニを戦略的に特権化して取り上げ、この少女を主人公にした物語のリベラリズムや共感のポリティクスとは異なる政治性の意味を探ることが必要かもしれない[4]。より適切な言い方をするなら、奴隷制廃止運動の系譜につらなるようなハーマイオニ個人のリベラルな活動というよりは、むしろ、彼女を結節点とする女生徒集団の集合的物語とその歴史的系譜・空間的転回を、モダニティという歴史条件に規定されたさまざまな時間性・空間性のリズムをもつ社会・地域・世界を視野に入れながら、グローバルに探るというプロジェクトを、提案してみたいのである。

3. ガールズ・スクール・ストーリーの系譜と転回、あるいは、『聖トリニアンズ女学院』の現在を歴史化するために

ガールズ・スクール・ストーリーは、少年向けの寄宿学校物語の人気に対応して発展し、兄弟たちと対等の読書経験を享受したいという少女たちの欲望にアピールしたとされてきた。こうした見解は、しかし、18 世紀以降の十分に立証されてきた少女たちのリーディングの歴史とジェンダーに特化し

た児童文学の発展とその研究（development）を否定するものでしかないといえるだろう。たしかに、最近までのスクール・ストーリー研究に関わる批評的な関心は男子寄宿学校物語の成長・発展――トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』やフランク・リチャーズの「グレイフライヤーズもの」など――に向けられてきた。だが、少女たちの学校生活を描いた物語も、それ独自の起源や文化を有していることが近年主張されてきている（Simons 175-76）。[5]

20世紀以降の現代につながるガールズ・スクール・ストーリーのなかでもっともよく知られた例として挙げられるのは、L・T・ミードの作品『少女たちの世界（*A World of Girls*）』（1886）である。そのタイトルが示すように、『少女たちの世界』は、自律的な規制を自らおこなう、男性の権威にしたがう世界からは独立した環境を構築することをめざした「閉ざされた女性共同体（an enclosed female community）」を描いている[6]。そしてたしかに、ジュディ・シモンズが指摘するように、その共同体の空間であるラヴェンダー・ハウスは、ブラジルの少なくとも初期のテクストにおいてみられるような小規模の学校のプロトタイプとなっており、そこでは5歳から16歳までの少女たちが、それぞれのエートスや境界をもつ下位区分の共同体に分かれながらも、全体として集団生活を送っている。

> The narrative focus of the book, as in Brazil's texts, falls upon personal allegiances and tensions, the development of friendships, exclusive alliances between groups or pairs of girls, jealousies and experiences of alienation or exclusion. The girls, like their twentieth-century equivalents, enjoy midnight feasts and prize-giving ceremonies, and prepare end-of-term entertainments. But Lavender House is both an educational establishment and a training ground preparing the girls for the womanhood that awaits them. In this it differs from the majority of Brazil's novels, which, although they might pay lip service to the idea of a life beyond the school grounds, essentially celebrate girlhood itself as a state to be enjoyed, rather than a necessary preparation for the life to come.（Simons 180）

物語の展開において焦点となるのは、端的にいって、女生徒たちの間で成長・発達する友情関係、すなわち、女生徒たちの諸集団やペアの間だけで排他的に結ばれる親密な絆あるいはまたジェラシーや疎外や排除の経験である。だ

が、少女たちが女子寄宿舎学校のさまざまな行事・儀式・イヴェントに参加する空間であるラヴェンダー・ハウスは、彼女たちが学ぶ教育の場であるとともに、いずれ良妻賢母として用意・想定された大人の女性像に成長するための準備となるトレーニングをする場として表象されている。この点でミードのガールズ・スクール・ストーリーは、ブラジルの多くのテクストと異なっている、というのがシモンズの解釈だ（Simons 180）。つまり、ブラジルが提示する物語は、寄宿舎学校の向こうに待ち受けている女性像についてのリップ・サーヴィスをすることはあっても、根本的に、少女性をそれ自体享受すべき状態として力強く肯定するものとなっている。

ブラジルをミードと比較・対照することであきらかになることはなにか。たしかに、少女たちを主人公にした学校物語を発明したのは、ブラジルではなかったが、そうした物語のある意味で成就・到達点となるテクスト群を20世紀の英国において文化生産し、その文化空間から発してさまざまに広め流通させたのは彼女だったのであり、それらの物語と自由を享受するそのモダンな少女表象は、さまざまな歴史的継承者に受け継がれて、21世紀のJ・K・ローリングにつらなる系譜を準備したことになる。

> Her characters are not watered-down versions of their male counterparts in the schoolboy fiction of the same period — they do not compete with Harry Wharton, Bob Cherry and their chums. They are substantial creations, spirited, resourceful and independent, and they validate feminine independence and authority for girl leaders everywhere.（Simons 180）

こうして、シモンズによれば、ブラジルが提示した少女たちは同時期に男性作家によって生産されたスクール・ストーリーに登場するキャラクター・イメージを水で薄めたようなものであるどころか、その活力とリソースを備えた自立心ある存在は自立した女の妥当性を保証しあまつさえ女性リーダーシップを正当化するものでもあった。

当然予想されるように、ある独特なやり方で英国の男性中心社会に対して提示された少女たちの自立と自由の実現や要求の衝動は、それに対する反動的な批判、そしてまた、けして上品とはいえない笑いや性的ほのめかしを通じた嘲笑を呼び起こすことになった。

> Schoolgirls had been well primed for the blossoming of the school story by

> the early books of Angela Brazil ... whose energetic form captains and prefects are silly, exuberant and intense in a way which is highly caricaturable. Though they were taken seriously by several generations pubescent readers, they have acquired for the no-schoolgirl a laughable quality which certainly was not intended. The school girl as a joke owes its inception ... to Angela Brazil.（Cadogan and Craig 179）

こうして、女子寄宿舎学校の生徒たちは、アンジェラ・ブラジルの初期の作品を通じてスクール・ストーリーの新たなスターとして勃興したわけだが、有り余るエネルギーを備えた級長や監督生というおきまり・お約束のキャラクターたちは、そのばかばかしく、並外れて元気で、強烈なイメージのために大いに戯画化されることになった。絵空事でリアルでないジョークのような存在としてのスクール・ガール像が生産され定着したのはブラジルに原因があった、というような批判がなされることになる。[7]

ブラジルがその文化生産において決定的な役割を担ったスクール・ガールズのイメージは、いくつかの方向、少なくとも、以下の2つに拡張していった、とみなされている。ひとつは、ドリタ・フェアリー・ブルースのような作家が『セント・ブライズ学園のナンシー』（1933）等の「ナンシー」シリーズにおいて示してみせた洗練とリアルさへの志向である。これは、ひょっとしたら現実に存在するかもしれないと読者に思わせるような、あるいは、彼女たちの自由奔放なエネルギーが、結局のところ、さまざまなゲームの実施や参加においてなされる競争のフィルターにかけられて、英国社会や大英帝国のために奉仕することにつながるように回収できるような、少女が描かれるようになった、ということか。他方、文化的テクストにおけるこのような集団的な少女の表象について、もうひとつ別の方向への拡張もあり、それは、いわゆる聖トリニアンズものと呼ばれるさまざまなテクストに提示される少なからざる逸脱や歪曲があからさまな展開･転回に代表される。ぞっとする性向、風変わりな制服や体操着を身に纏った、そのセクシーな女生徒は、大人の読者がちょっと楽しむために変形され商品化された原型的なイメージとなった（Cadogan and Craig 180）。

と同時に、興味深いことに、これとは矛盾するような批判も存在しており、20世紀前半期に文化生産されたガールズ・スクール・ストーリーには思春期の少女たちの性的欲望や成熟が十分に表象されていない、または、そうした問題が多くの物語において忌避されることで欠如しているという指摘

がなされている[8]。この場合には、結婚と出産を人生の目的・究極の意味や価値として少女の期間はそうした成長の終着点への準備・トレーニングの時間だとするのではなく、少女性とそのいわば凍結した時間性を、そのままの存在様態において、肯定することは、たとえば、英国イングランド南部の田舎を舞台に据えたエルシー・J・オクセナムのアビー・シリーズにおけるように、セックスへの欲望や性化された身体への大きな恐怖や不安を暴露していると解釈されることになるだろう。しかしながら、そうした批判の例として挙げられる以下の引用を注意深く検討してみるならば、聖トリニアンズのセクシーな少女たちの対極に位置付けられているスクール・ガールズをめぐる対立には、未熟な少女 vs 成熟した女性やイングランドにおける田舎 vs 都会といった単純な対立だけでなく、雑誌や小説といった活字メディアと映画といった映像メディアあるいは英国・イングランドと米国・ハリウッドとの間の対立・矛盾が規定要因として関与していることがわかる。

> In writers like Elsie Oxenham, the tendency to emphasise the joys（the “fun”）of childhood was part of a deliberate attempt to counter teenage precocity, noticeably more widespread since the rise of Hollywood. In the 1920s the cinema was still a long way from being accepted by the English middle classes; and its influence generally was deplored as being conductive to shoddiness and vulgarity ... .That these impulses rarely involved anything more questionable than the desire to wear make-up or a taste for a magazine fiction, was in fact an evasion of the crucial issue of self-indulgent sexuality. But girls’ writers were in the artistically awkward position of having to deny, by implication, the nature of adolescence ...（Cadogan and Craig 180）

オクセナムが10代の少女が孕む性的早熟さに対して意図的に対抗しようとしたのは、英国社会でもより顕著なかたちで広く流通し普及した少女のセクシュアリティを文化的に構築した、1930年代末に黄金期を迎える前の、米国ハリウッド映画の勃興にほかならなかった。[9]

1920年代のハリウッド映画のスクリーンに華やかにセクシーに登場するヒロインたちの行動様式によって突きつけられた問題とは、お化粧したいという願望や雑誌に掲載された扇情的なフィクションへの趣味にかかわるだけでなく、性的再生産にはけして結びつくことのないような放蕩な性的欲望あるいはその無限の機械的反復可能性を備えた欲望の自由にかかわるもので

あった。だとするならば、英国のナショナルな境界を越えてグローバルあるいはトランスナショナルに転回する欲望と自由をめぐるこの重大な問題を歴史的に編制したのは、英国の少女文化と米国ハリウッド映画というグローバルなポピュラー・カルチャーとの間の矛盾であり、こうした矛盾関係こそが、英国のガールズ・スクール・ストーリーの意味を決定的に規定する要因のひとつだった、と解釈することができるかもしれない。

チャールズ・ハミルトンの諸作品、『ジェム』や『マグネット』といった少年雑誌などに対して、ジョージ・オーウェルによって1939年になされる批判的言及が存在しているとはいえ男子寄宿学校物語のポピュラリティが衰退しはじめたとされる英国の1920年代は、ガールズ・スクール・ストーリーの時代だった、といわれる（Hunt 107-8）。たしかに、寄宿学校を舞台にした少女のスクール・ストーリーはミードのような作家たちにより1880年代に始まり確立されたものではあったが、ポストコロニアルな状況にあったともいえる第1次大戦前の米国にはすでにみられた健康的で元気な少女たち、その生活や教育の空間において男の子たちも同等の仲間とみなすことができるモダンな女生徒たちは、英国国内の少なくとも中・上流階級の文化空間には見出すことができなかった。そうした自由な少女集団の表象が、政治的には18世紀にすでに独立をはたした米国を経済的・文化的にはいわば植民地として支配し続けた大英帝国あるいはリベラルな帝国イギリスの社会や文化において、ポピュラーなものとして数多く集団的に存在可能になったのは、第1次大戦後になってからのことであった。

ブラジルやその後継者たちによって生産されたスクール・ストーリーと少女表象に対してなされた少なからざる批判にもかかわらず、あるいは逆に、このような批判が、そのたしかな存在を確証しているともいえるのだが、証拠を挙げて説明することなど必要ないようなブラジルのテクストの人気は、これまでとはラディカルに異なる女性性を表象した文学・文化テクストにおける新たな方向性を指し示すものであった。とりわけ、ガールズ・スクール・ストーリーにおけるきわめて特異な未来を予示していたのが、「彼女の自明のポピュラリティ（Brazil’s self-evident popularity）」であった（Simons 181）。[10]

最後に、ブラジルのガールズ・スクール・ストーリーの系譜を引く、と同時に、サールの大人の男性の視点からの戯画化されたコミックをさらに転倒する例として、21世紀の英国から、ナショナルだけでなくグローバルにも発信された映像テクスト『聖トリニアンズ女学院』を取り上げて、本論の議論を締めくくりたい。1990年代以降に活況・盛況を呈したといわれる英国

映像文化の部分を構成する映画『聖トリニアンズ女学院』は、2007年UKフィルム・カウンシル（英国映画評議会）の後援を受け、公的資金を使って制作されたものであるが、このテクストにおいては、ブラジルがポピュラー文化の空間において刷新し広めた女生徒たちの集団表象を、さらにグローバルにヴァージョン・アップして、自由でエネルギッシュな言動や規律やコントロールを潜り抜けて作動し続ける多種多様な姿をとる無限の衝動や欲望に特徴づけられたような、少女の集団性が、その社会性や歴史性の刻印とともに、表象されている。英国映像文化としての『聖トリニアンズ女学院』は、その文化的生産の過程（生産・流通・消費あるいはその受容・解釈）の現在が歴史化されるためにも、いまや旧来のナショナルに創設され制度化された児童文学に取って代わり支配的となりつつあるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーとその地球規模で再編され拡張していくグローバルなトランス・メディア空間のコンテクストに、置き直されなければならない、と同時に、「ハリー・ポッター」シリーズの出現とそのグローバルな現象がたちあらわれて以降の現代資本主義世界にみられるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興もまた、『聖トリニアンズ女学院』にいたるガールズ・スクール・ストーリーの系譜と転回において解釈されなければならない。このような手続きをふむことによって、グローバル・ポピュラー・カルチャーの部分を構成する少女だけでなく少年をも含むコドモの成長物語の価値について、そしてまた、このように集団性において捉え直された児童・コドモの自由の問題が、有意義なかたちでそしてまた新たな意味のある問題を産み出すようなやり方で、探られることになるだろう。

Notes

＊本研究はJSPS科研費JP25370273の助成を受けたものです。

1　旧来の児童文学をポピュラー・チルドレンズ・リテラチャーの勃興によって再考する研究を企図したGrenbyとは別に、ポスト冷戦期のグローバリゼーションの進行にともなう児童文学の変容とそのさまざまなテクストに読み取るべきユートピアを論じたBradford et al.も、また、以下のように「ハリー・ポッター」シリーズに言及している。

> … what *New World Orders* argues is that utopian texts for children do “serious political work” … . In our consideration of how texts engage with the process of transformation, we offer adults who might

> not normally read or study children's texts an invitation to transform their own reading choices and take these works seriously. After all, the phenomenal success of Harry Potter proves that children's books have an appeal that transcends conceptual divisions between writing for adults and for children.（Bradford et al. 185）

さらにまた、かつてはポピュラー・カルチャーとみなされたSFが20世紀後半にハイ・カルチャー化しサイバーパンクとして再評価されたときに、そうした文学・文化の変化をもたらした歴史的運動と弁証法的に連動するかのようにSFの興隆に続くファンタジーのグローバルな流行があったことを、「ジャンル・フィクション（genre fictions）」――それまでの標準的な4つのジャンルである探偵小説、ロマンス、SF、ホラーといった区別を越えて増殖したthe "blockbuster," the family saga, the "sex and shopping" novel, "chick-lit," "new man " and "lad" fiction等々――をたどりながら示したものにMcCrackenがある。

2　論集『英国におけるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャー』においてエクルシェアがおこなった「ハリー・ポッター」のポピュラー性のより詳細な議論については、Eccleshareをみよ。

また、『英国におけるポピュラー・チルドレンズ・リテラチャー』第4部のイントロダクションにおいてジュリア・ブリッグスは、C・S・ルイスが挙げている「子どものために書く3つの方法」のなかの3つ目の「大衆が求めるものを与える」に言及しながら、この方法にルイスが示した軽蔑に反して、これまで児童文学の作家たちが、出版市場に焦点をあて、あるいはまた、特別な大衆である子どもをターゲットにして、執筆していたことを指摘している。なかでも、イーニッド・ブライトンが、いくつかのシリーズものをそれぞれ異なる特定の年代の子どもを念頭に置いて執筆していたことや彼女のテクストが、子どもたちのより自由な感情に訴えつつ、ときには読者である子どもにショックを与えたり驚愕させたりすることにも言及している。こうしたブライトンらにみられる策略から浮かび上がってくるのは、以下のような問いだ。すなわち、今日のコドモは、かつての子ども・児童と比べて、審美的な趣味のレヴェルだけでなく、経済的なレヴェルでも、大人――とりわけ親や教師、図書館司書や出版社――の影響から自立しているという点において、どのように異なっているか。

ブリッグスが、英国の子どものための物語の市場においてもっとも影響力がありある種の「使徒伝承」を形成してきたとする3人の作家、すなわち、ブライトン、ダール、ローリングは、それぞれのやり方で、読者である子どもの観点からポピュラーなるものの意味を再編したと論じている。ローリングは挑戦的なほどに長い物語を書いたが、その意味・価値は、部分的には読者に十分なリーディング・スキルを求めるという実質的な面にあると同時に、映画、録音・録画テープ、ゲーム、ウェブサイトにおいてさまざまに姿を変えて提示されることにある。ポピュラー性をめぐる現代のコドモに向けられた本あるいは文化テクストの評価は、そのようなさまざまなトランス・メディア空間において再生産される過程で産み出される付加的な形式を増殖

させるとともに、逆に、そのようなメディア空間の領域を拡大する必要がある（Briggs 248-49）。

3 “Hogwarts, *Harry Potter's* imaginary school for young wizards, is not simply an old-fashioned boarding school – open to anyone from the right class – with magic on the curriculum. Nor, obviously, is it a comprehensive. More appropriately, the books' eponymous hero attends a school which is selective and specialised: choosing students for their talent and training them intensively in their assigned vocation. Here again, Harry is presented to us as a boy for our times, even a mythical embodiment of all the priorities and prejudices which constitute the New Labour 'structure of feeling' : a truly Blairite hero ... .But what is perhaps most significant about Harry Potter is the particular elements of older types of tale which it chooses to retain for contemporary consumption. What is emphasised again and again in the books is not simply the ordinariness of Harry' s aspirations, but his historical uniqueness. It is true that Harry' s is a world in which the echoes of older value systems – ones favouring community, justice, sharing, democracy, as well as conformism, elitism, aristocracy and racism – can still be strongly heard. Nonetheless, it is also a world in which the way to succeed is to exploit one's talents, engage in specialised training, and bring home plenty of treasure. Other paths to fulfilment are almost certainly blocked; but in Harry' s world as in Tony' s, as long as you don' t go making trouble with the house elves, at least no-one will care what you wear”（Gilbert）.

4 「ハリー・ポッター」シリーズの作品世界が突然グローバル化される4巻においては、国民国家の集合体として成立している魔法界の世界におけるナショナリティの対立あるいは差異が普遍的な善と悪の戦いとして描かれるだけでなく、ハーマイオニによる屋敷しもべ（house-elf）の解放運動が、屋敷しもべ妖精福祉振興協会（Society for the Promotion of Elfish Welfare）の表象とともに、提示される。だが、そうした奴隷としてのエルフに公民権を与えることの要求すなわち奴隷制廃止の運動を主張するハーマイオニのヴォイスが、エルフの労働のもとに存立しているホグワーツという彼女の帰属する場・「居場所」自体と齟齬をきたしていること、さらには、ドビーのようなエルフの奴隷からの解放が低賃金労働者として包摂されるといったように、個人としての少女ハーマイオニの政治的立場が右翼・左翼の中道を標榜するブレア政権の「リベラル左翼」つまりネオリベラリズムのアレゴリーになっているという指摘については、三浦 41-42 の議論とともに、ギルバートの以下の引用を、参照のこと。

> Where there is direct 'political' intervention in the books, it follows the script perfectly. When Hermione, the muggleborn feminist swot of the school tries to organise the long-suffering house-elves to resist their condition of perpetual enslavement, her campaign is met with mockery and indifference; even the house-elves themselves don' t want to be free. What actually happens is that one elf, the quasi-heroic Dobby（having learned to live with freedom and to demand wages for his work）comes to stay at Hogwarts. Hermione gives up on her campaign to organise the elves or her class mates, but

resigns herself to the possibility that Dobby's example may slowly raise their consciousness. It is a perfect allegory of incremental, Blairite centrism.（Gilbert）

"the muggleborn feminist swot of the school" としてのハーマイオニの意味をさらに探る可能性、たとえば、ジェンダーの問題を人種やセクシュアリティとも関係付けたうえで現在のグローバル資本主義世界におけるネオリベラリズムや「自由」を議論するヒントを提示している例として、一橋大学リレー講義「ジェンダーから世界を読む」シリーズのひとつとして出版されている三浦・早坂がある。さらに、21 世紀の現在をポストフェミニズム状況として捉えたうえで第 3 波フェミニズムとそれをめぐる欲望・言語・労働をさまざまなかたちで取り上げた日本ヴァージニア・ウルフ協会論集『終わらないフェミニズム』も参照のこと。

5　周知のように、近代のガールズ・スクール・ストーリーの起源は、19 世紀後期とみなされるが、寄宿学校生活を描いた物語に関していえば、その起源を 18 世紀、セアラ・フィールディングの『女教師――少女のための小さな塾』（1749）まで遡ることができるし、また、フィールディングの場合のジョン・ロックではなくロマン主義の時代のジャン・ジャック・ルソーの教育論を輸入・紹介あるいは文化的翻訳をしたエッジワース父娘の著作が言及されるのがふつうのことになっている。ただし、ネオリベラリズムやその自由の問題を、19 世紀の福祉国家の見直しとともに、再検討するという意味では、ハリエット・マーティノーの『クロフトン校の少年たち』とその歴史的サブテクストをなす当時の政治経済学の諸テクストにも目配りをすることが、現在においても、なお必要かもしれない。

6　アンジェラ・ブラジルの小説やその継承者たちが、ボーイズ・スクール・ストーリーからその要素を借用しているとするならば、学校自体も同様である。チェルトナム・レイディーズ・カレッジ、バドミントン、ローディーン、ワイクーム・アビーなど女子のための主要なパブリック・スクールは、ラグビー校、イートン校、ハーロウ校のような男子の有名なパブリック・スクールのそれを反映した標準カリキュラムを導入し、知的到達に対する野心を明確にしている。女子のパブリック・スクールは、当初、男子校をモデルとして古典言語、スポーツや人格形成（character building）に重点をおいたが、その後、これを簡便なフレームワークとして利用することにより、個人に新たな重点を置いた別個の女性化した文化に改良していった。ボーイズ・スクール・ストーリーが男性的エートスを促進し強靭さや独立・自立精神を奨励するのに対して、ガールズ・スクール・ストーリーは、愛や友情の暖かさや信頼といった、女性読者だけでなく男性読者にもアピールするような点に特別な関心を示している。こうして学校という実際の教育空間における女子教育に対してよりリベラルなアプローチを可能にするようなカリキュラム上の変更が、小説テクストにおいても反映された（Simons 176）。

7　ブラジルとそのテクストが産み出す効果である人気に関する意味や価値の解釈・評価をめぐる対立・矛盾は、ジェンダー（男性 vs 女性）やジェネレーション（大人 vs 子ども）だけでなく、階

級によっても規定されていると、みなすべきかもしれない。ただし、階級とはいっても、ここで想定されるのは、単純反映論的に分析・解釈されるような資本家vsプロレタリアートの階級対立やいわゆる諸社会階級（social classes）の差異・階層関係というよりは、戦間期とりわけ1930年代に出来した資本主義と共産主義の政治的・イデオロギー的対立、あるいはさらに、第2次大戦後における英国の福祉国家・社会主義と米国の冷戦リベラリズム・消費文化との抗争、等々によって、重層的に決定される階級関係である。そして、このような階級による観点からブラジルの意味を再解釈する出発点として、Geoffrey Trease の *Tales Out of School*（1948）を挙げることができるかもしれない。戦間期から自ら作家活動を続け戦後まで生き残った著者ジェフリー・トリーズがものしたこのテクストは、児童文学をはじめてまじめに取り上げておこなったサーヴェイであり、それまでの教訓的・道徳的な子ども向け文学作品とは一線を画するポピュラーで商業主義的な文化テクスト、特に、ブラジルやイーニッド・ブライトン（Enid Blyton）のガールズ・スクール・ストーリーズなどを批判しただけでなく、英国児童文学の第2の「黄金期」を代表するJ・R・R・トールキンやC・S・ルイスのファンタジーともジャンルを異にするリアリズムこそを英国児童文学の新たな方向性として提唱したテクストとして位置づけている。作家としてのトリーズは、20世紀初頭までに英国の児童文学において確固たる地位を確立した歴史物語（Historical Fiction for Children）というジャンルの代表的存在として評価されている。実際、共産主義のプロパガンダを広めるためにロンドン、イースト・エンドのスラム街で活動したトリーズは、12世紀イングランドのロビン・フッドを圧制に抵抗する左翼的・共産主義的リーダーとして描いた *Bows Against the Barons*（1934）や人民・民衆の観点からエリザベス朝期の英国を描いた *Cue for Treason*（1940）が一般的な英国児童文学史で取り上げられるのがふつうのようであり、『英語圏諸国の児童文学I』もそのような扱いになっている（福田85-86）。ただし、同書の「学校物語（School Stories）」も言及しているように、20世紀前半のP・G・ウッドハウスやチャールズ・ハミルトンによる男子寄宿学校物語とは異なる通学制の学校を舞台とする *No Boats on Bannermere*（1949）をトリーズは書いてもいる。その歴史的背景となっているのは、公的補助金による教育、男女共学、近代的なカリキュラムへの改変等々といった福祉国家における教育政策・教育空間の変容にともなう、戦後の寄宿学校物語の人気衰退である。湖水地方の通学制グラマー・スクールに通う少年たちを公立中等学校に通う少女たちとともに描いたトリーズの学校物語は、21世紀のJ・K・ローリングと同じシングル・マザーの表象を産み出す離婚やその他の同時代の社会問題を取り上げており、19世紀英国のパブリック・スクールを表象する代表的・範例的テクスト、トマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活（*Tom Brown's School Days*）』（1857）の対極にあるRobert Cormier, *The Chocolate War*（1974）、閉じた教育空間である学校で起こりうる教師や上級生による暴虐・暴力すなわち陰惨で救いようのないイジメを主題化したテクストにつながるものとして位置づけられている（藤井）。

ひょっとしたら、このようなトリーズのリアリズムを志向する児童文学とブラジルのガール

ズ・スクール・ストーリーとの間の多種多様に交錯した対立や矛盾を、その起源あるいはさまざまな始まりのひとつの契機において、イデオロギー的に解決するつまり隠蔽したり転位したりする過程において創設され制度化されたのが、英国児童文学というナショナルな文学的・教育的言説・制度だったのかもしれない。奇妙な歴史的めぐりあわせにしか過ぎないのかもしれないが、「ハリー・ポッター」シリーズの最初の作品が英国で出版されたちまちベストセラーになった次の年である 1998 年、トリーズは亡くなっている。

8　英国モダニズム小説を代表するひとりであるヴァージニア・ウルフの小説を取り上げながら、19 世紀末から第 1 次大戦において文化生産された少女の表象とセックスへの欲望の問題を、優生学の言説や女性参政権運動との関係において論じたものに大田「モダニズム的（反）成長物語」がある。また、同じ時期の英国文学だけでなくさまざまな時空間を横断するかたちで「出産する母から消費する少女へ」のけして単線的・直線的ではない歴史的過程をたどった、大田「地政学的無意識」も参照のこと。

9　1930 年代における英国劇場文化と米国ハリウッド映画との間の関係性あるいは両者の移行の問題を論じつつ、「長い 20 世紀」のなかの映像文化を論じたものに大田「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』」がある。

10　20 世紀から 21 世紀にかけての英国およびグローバルな資本主義世界におけるポピュラーなるものの再編については、大田・大谷がより長いスパンとより広い歴史的コンテクストで論じている。また、日本の少女文化や集団的な形式によって提示された少女の表象を、第 2 次大戦後に宝塚歌劇団が翻案した『ロミオとジュリエット』を取り上げて、解釈したものとして、Ohtani がある。

Works Cited

Bradford, Clare, Kerry Mallan, John Stephens, and Robyn McCallum. *New World Orders in Contemporary Children's Literature: Utopian Transformations*. London: Palgrave Macmillan, 2007.

Briggs, Julia. "Introduction to Part IV." *Popular Children's Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 101-3.

Cadogan, Mary, and Patricia Craig. *You're a Brick, Angela!: A New Look at Girls' Fiction from 1839-1975*. London: Victor Gollancz, 1976.

Eccleshare, Julia. "'Most Popular Ever' : The Launching of Harry Potter." *Popular Children's Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 287-300.

Gilbert, Jeremy. "Harry Potter and the Third Way." *openDemocracy*. openDemocracy Ltd. 29 Nov. 2001. 1-3. Web. 16 Sep. 2016.

Grenby, M. O. "General Introduction." *Popular Children's Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 1-20.

Hunt, Peter. *An Introduction to Children's Literature*. Oxford: Oxford UP, 1994.

McCracken, Scott. "The Half-lives of Literary Fictions: Genre Fictions in the Late Twentieth Century." *The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature*. Ed. Laura Marcus and Peter Nicholis. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 618-34.

Ohtani, Tomoko. "Juliet' s Girlfriends: The Takarazuka Revue Company and the Shôjo Culture." *Performing Shakespeare in Japan.* Ed. Ian Carruthers, et.al. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 159-71.

Simons, Judy. "Angela Brazil and the Making of the Girls' School Story." *Popular Children's Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 165-81.

Trease, Geoffrey. *Tales Out of School*. London: New Educational Book Club, 1948.

大田信良「地政学的無意識と歴史の統語論――出産する母から消費する少女へ」『英學論考』29（1998）: 1-29.

――――「ノエル・カワードと再婚の喜劇としての『或る夜の出来事』――『長い二〇世紀』のなかの映像文化」『アメリカ映画のイデオロギー――視覚と娯楽の政治学』細谷等・中尾信一・村上東編 東京 : 論創社 , 2016. 106-35.

――――「モダニズム的（反）成長物語のなかの優生学と女性参政権運動（サフレジズム）」『帝国の文化とリベラル・イングランド――戦間期イギリスのモダニティ』東京 : 慶應義塾大学出版会 , 2010. 36-54.

大田信良・大谷伴子「ポピュラー・カルチャーのグローバルな再編とはなんだったのか？――文化的価値の再解釈に向けて」『イギリス映画と文化政策――ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』河島伸子・大谷伴子・大田信良編 東京 : 慶應義塾大学出版会 , 2012.157-82.

日本ヴァージニア・ウルフ協会ほか編『終わらないフェミニズム――「働く」女たちの言葉と欲望』東京 : 研究社 , 2016.

福田泰久「歴史物語（Historical Fiction for Children）」『英語圏諸国の児童文学 I［改訂版］――物語ジャンルと歴史』日本イギリス児童文学会編 京都 : ミネルヴァ書房 , 2013. 85-90.

藤井佳子「学校物語（School Stories）」『英語圏諸国の児童文学 I［改訂版］――物語ジャンルと歴史』日本イギリス児童文学会編 京都 : ミネルヴァ書房 , 2013. 61-66.

三浦玲一「選択と新自由主義と多文化主義――グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」『英文学研究』88（2011）: 33-47.

三浦玲一・早坂静編『ジェンダーと「自由」――理論、リベラリズム、クィア』東京 : 彩流社 , 2013.